



Title	アルホルチン旗におけるモンゴル族と満洲族のオボー崇拝
Author(s)	サインチョクト
Citation	モンゴル研究. 2007, 24, p. 10-19
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/102329">https://doi.org/10.18910/102329</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 《論 文》

# アルホルチン旗におけるモンゴル族と 満洲族のオボー崇拜

サインチョクト

## はじめに

ノトク(故郷)という言葉はモンゴル人の心に大きな響きをもたらす言葉であろう。モンゴル人の間で常に語られる「ノトクを命のように愛する」という言い方は、彼らの「ノトクに命がある」という自然観と深い関係があると思われる。モンゴル人にとって、自分たちの生活の舞台となる自然環境、つまり森林、草原、山水であるが、こうしたノトクにおける自然観はオボー崇拜にもっともよく表現されているのである。本稿は、モンゴル人のノトクにおける価値観を明らかにすることを目的とし、内モンゴル東部のアルホルチン旗におけるモンゴル族とモンゴル化した満洲族のオボー崇拜についての試論である。

モンゴル族の中の一部族であるホルチンは主に内モンゴル自治区の哲里木盟(Jirim aimag)、興安盟(HingGan aimag)と赤峰市(Ulaanhad hot)に分布している。

アルホルチンはさらにその一部で、清朝初期の1546年に、大興安嶺の北、額爾古納(Ergune)河の流域から今の赤峰市のアルホルチン地域に移住してきた。アルホルチン部族はモンゴル族の伝統的な風俗習慣を保っていることが知られている。哲里木盟と興安盟に分布するホルチン部族はアルホルチン部族より百年前に当地に移住してきた。ホルチン部族はそのため長い間満洲族と隣接して暮らし、現在はほとんどの者が農業を生業としているが、アルホルチン部族は未だ定住型牧畜

生活を営んでいる。しかしアルホルチン・モンゴル族が満洲族と雑居し牧畜業を営んできたこともまた事実である。そのため満洲族と共に通する文化を持つようになっている。そのような現状をふまえて、本稿ではアルホルチン旗におけるモンゴル族と満洲族が共有する文化的側面の一つであるオボー崇拜について比較文化論的視点から考察を行いたい。

まずアルホルチン旗の風俗習慣に関する先行研究を概観する。

アルホルチン旗出身のHuturangG-a氏は長年アルホルチン旗で実地調査を行って、『アルホルチンの山水』(1997)という本を出版した。本書で氏は、アルホルチン旗の地名の由来、山水に関する伝説とオボー祀りに関する風俗習慣を記録している。また『アルホルチン旗誌』(1994)という著書では、アルホルチンの風俗習慣が住宅、服装、飲食、出産、婚姻、葬式、信仰、禁忌の各項目にわたって記述されている。また、Buyan-ulji氏の整理した『アルホルチンの口承文学』(1986)もアルホルチン旗の風俗習慣の研究に貴重な資料を提供している。Buyan-ulji氏は『アルホルチンの満洲族』(1992)で満洲族の氏族の由来を考察している。Damdinsureng氏(満洲族)は『アルホルチン旗のsumuについて』(1990)において、モンゴル族と満洲族の村が形成された経緯に触れている。しかし、アルホルチン旗におけるモンゴル族と満洲族のオボー祀りに関する先行研究は見られない。

## 2 アルホルチン旗の概要

現在中華人民共和国に属する内モンゴル自治区赤峰市(元昭烏達盟)のアルホルチン旗はモンゴル族、漢族、満洲族が雜居している牧畜旗である。アルホルチン旗は東経 $119^{\circ}2'$ ～ $120^{\circ}1'$ 、北緯 $43^{\circ}23'$ ～ $45^{\circ}25'$ 、大興安嶺山脈南部の東に位置し、旗面積は1万4千平方キロメートルである。地勢は西高東低で、総面積の26.44%が山地、丘陵は35.40%、平原は14.36%、砂漠は23.80%をそれぞれ占めている(『内蒙古自治区地図冊』—1996)。総面積の約80%を占める地域に10万人のモンゴル族が定住型牧畜生活をしており、その中に満洲族の村が三つある。そのうち2千人あまりの満洲族が定住型牧畜生活をしている。旗内の約20%の地域に17万人の漢民族が集中し、農耕に従事しているほか、また5千人あまりのモンゴル族が農耕を生業としている。

『アルホルチン旗誌』によると、アルホルチンとは「北の弓矢を持つ人々」という意味であり、チンギスハーンの弟ハサルを祖先とする部族である。アルホルチン旗を流れるハハリンゴル川(Qaharin gol)(長さ2552キロメートル)の名の由来はハサリンゴル(ハサルの川)である。1425年、呼倫貝爾盟(kulunbuir aimag)の北部を流れるエルグネ川(Ergune gol)流域に遊牧していたホルチン部族はオイラト部族に打ち破られ、一部のホルチンは、南の方へ移動していった。それが、後の哲里木盟のホルチンである。当地に残った一部のホルチンはアルホルチンと自称した。しかし1546年、ハサルの15代目の子孫であるフンデレンダイチンがアルホルチン部族を率いて現在の地域に移動した。

1630年、アルホルチン部族は清朝に帰順する。1636年、即ち清朝の崇徳元年、ムザン(満洲語)というモンゴル人がアルホルチン旗の王になり、

1642年清の皇帝の親族の女性と結婚した。1669年に二代目の旗王バダマも清の皇族の女性と結婚し、それをきっかけに一部の満洲族がアルホルチン旗に移住はじめ、モンゴル族と雜居するようになったのである。

1669年、満洲族の官吏ウィフィズはアルホルチン・モンゴル族のオンドルナという女性と結婚して、男の子十人をもうけた。そのうち五人がラマ僧になったが、残りの五人はモンゴル女性と結婚し、各々が五つの部族の祖となった。長男はハラチル・アイマグ(黒石部族)の、次男はホヤルフトク・アイマグ(二つの井戸部族)の、三男はバルーンボラグ・アイマグ(西の泉部族)の、四男はズーンボラグ・アイマグ(東の泉)の、五男はズーンドロット・アイマグ(東の丘陵部族)の祖となった。

五つの部族の一部はアルホルチン旗内部での移動を繰り返したが、ウンドルウラーン村、ボマンゴル村、ファゲンタル村という三つの村に定住してきた。

彼らは部族間の通婚を厳禁し、族外婚を厳守してきた。当時は満洲族に税を課さなかったので、モンゴル族は彼らと婚姻関係を結び、姻戚になることを望んだ。満洲人女性の満洲服も美しいとされ、モンゴル族女性たちが満洲服を真似てモンゴル服を作ることもブームになった。

1690年、アルホルチン旗のタイジ(モンゴル貴族に対して清朝から与えられた称号)は300人の兵士を率いて清朝のためにオイラト部族のガルダンと戦い戦死したため、アルホルチン王は「ダラハン王(栄誉ある王)」という称号を与えられ、それ以降世襲が認められた。このためアルホルチン旗のモンゴル族と満洲族の関係は一段と密接になり、モンゴル族と満洲族の生活習慣は互いに影響しあってきた。

アルホルチン旗のモンゴル族はこの他漢民族の文化的影響を受けつつも、牧畜生活を保ってきたの

である。

### 3 モンゴル族のオボー

モンゴル人は自然への崇拝の念を込めてオボーを作った。

「モンゴル人は山、川、湖、樹、泉、日、月、天などを祀るためにオボーを建てる。したがって川のオボー、泉のオボー、日のオボー、月のオボー、天のオボーといろいろ作られている」(Sampilnorbu—1990: 82)と言われるようその対象は様々であり、すべての自然物が祀られると言ってよい。オボーは「心靈のよりしろ」(江上波夫: 1961)とされ、オボーの下に何かを埋める。オボーの下に埋めるのは、そこに埋められた崇拝物に新しい命を与えるため、またはその命を甦らせるためであると言われている。

昔、オボーを建てるときまず土地を掘って、生きた人間を埋める風習があったという。埋められた人はそのオボーの主になったとされる。たとえば SulfungG-a は次のように述べている。「最初、バーリン旗のサイハンハン山を祀るとき、白い服を着て、白い馬に乗ったアルホルチン旗の若い力士がちょうどそこを通るのを見て、彼を掴まえて馬に乗ったままの姿でオボーの下に埋め山を祀った。その主は他の旗の人であったため、バーリン旗のモンゴル相撲の優勝者はときどきバーリン旗以外の旗の人になるのである」(SulfungG-a—1987: 61—62)

この儀礼ではモンゴル相撲の優勝者が犠牲になっている。

また「オルドスのドガンというオボーの下に灰色の馬に乗った男を埋めた。その男は埋められたとき北西の方に向かって大きな声で笑った。灰色の馬も三回嘶いた。それからこの山の北西の方で家畜がよく繁殖するようになった」という伝説がある。人々の豊かな生活のためにこの男が神に捧

げられたと考えられる。

また、「ザルト旗のガンジョールというオボーの下に大蔵經を牛車に積んでいくラマをとらえて、大蔵經と一緒に埋めた」とある。(Nasun—1993: 101)。ここでは仏教を布教するラマが犠牲になっている。

このように生きた人間をオボーの下に埋める風習はほとんどのモンゴル地域にあった。同様の例は枚挙にいとまがない。

「ハルハのボグド山(聖なる山)のオボーの下にハイタカが埋められている。スニット旗のオボーの下に蛇が埋められている」(Cagan—1991: 61, 93)。

「ハンギン旗のハーギンオボーの下には羊の前足が埋められている」(Sonum, Aliy-a—1994: 110)。

後には、死者、動物、植物、日用品を埋めるようになった。「昔、ラバイというタイジが弟と二人で暮らしていた。ある日、ラバイ・タイジは精神病になった。弟は仕方がなく兄を山の洞穴に連れて行き食べ物と飲み物を与えたが、兄が凍死したので山を掘って兄を埋め、上にオボーを建てた。そして、毎月三日と旧暦五月十三日にそのオボーを祀ってきた。それが今のラバイ山である」(Nasun—1993: 102-103)。

「チンギス・ハーンはオルドスのボルトルゴイというところを通るときそこで持っていた鞭を落とした。しかし鞭を拾わなかった。私が死んだらここに埋葬してくださいと言って鞭を埋めさせた」(Sonum, Aliy-a—1994: 21)。ここで鞭を埋めることは人を埋葬する儀礼の象徴的行為になっている。

日常的に頻繁に使われる馬の頭、羊の前足などをオボーの下に埋める風習はもっと一般的である。ネズ、白檀などの植物をオボーの下に埋める例も多く見られる。

日、月、星、山、川、天などの自然崇拝物と崇

拝の対象となる人、動植物はオボーを祀る儀礼によって守護神になって、オボーに棲息していくものと考えられている。「埋められた守護神の命を甦らせるためにオボーの祀りが続けられてきた」(Sainchogt—1998: 420)のであろう。

オボーを建てるプロセスは、まず期日を決め、それを主催者が皆に知らせる。皆はオボーに供えるものなどを準備する。そして競走馬を選ぶ。オボーを祀る前日には場所を選んで印をつけ、ヨロール(祝詞)を詠む。そして翌朝からオボーを建てはじめる。石を拾って積み上げるのである。積み上げてからオボーに供え物をささげる。オボーを三回回り、聖化された馬の飾り物を代えてオボーのナーダムが始まる。最後にオボーに供えた食べ物をみんなで分けて食べる。オボー祭りに来なかった人の分を残して配る」(CaGan—1992: 78—80)。オボーを建てた場所は聖地となり、オボーは集団の共通の命になる。集団の人々は共に自分たちのオボーを祀っていると考える。オボーの供え物を必ず皆で分けて食べるの神と共に食するという行為であろう。

モンゴルのオボーは3、7、13の数から成るものが多い。中心以外のオボーをシャビ(弟子)オボーといふ(Mansang—1990: 146-147)。つまり、モンゴルのオボーは一つの中心のオボーと2、6、12のシャビオボーからなるのが一般的である。それを「3、7、13のオボー」と呼ぶ。

要するに、モンゴルのオボーの本質はその鎮め物にある。つまりオボーは供え物の場である。その場を介して、人と超自然的な存在が交流する。オボーを祀る儀礼は集団の共通の命を甦らせるための行為である。オボーの供え物を神と人間が共食しなければならない。オボーをシャビオボーとともに3、7、13という数で建てるのは基本的な特徴である。この基本的な特徴は13の天神の恵みを受けることを良しとする天神に対するモンゴル人のシャマニズム的世界観を表していると言えよう。

#### 4 アルホルチン旗におけるモンゴル族のノトクのオボー祀りと満洲族の墓祀り

アルホルチン旗におけるモンゴル族のオボー祀りは全モンゴル族の習慣と共通点を持っているが、異なる特徴もある。

「アルホルチン旗のハンオーラ山のオボーを建てるとき、茶色の馬に乗った人を下に埋めたという。その人は茶色の馬に乗って鹿の群を飼っていた。だからこの山の守護神はときには鹿にも乗るという。ハンオーラ山の鹿を殺すことは厳しく禁じられていた。この禁忌のお陰でハンオーラ山の野生動物は非常に多かったという」(HuturangG-a—1986: 154-155)。「ザルト旗の王はハンオーラ山の禁忌を破って鹿を狩猟したので馬から落ちて死亡したという」(HuturangG-a—155-156)。鹿は北アジア諸民族の神話にトーテムとして登場する例が少なくないが、ここでは天神として禁忌の対象になっている。アルホルチン・モンゴル族の場合、このようなオボー崇拝が一般的であり、全てのモンゴル族のそれと共に通するものである。

ただし、満洲族が入ってきて、モンゴル族と同じく牧畜生活をするようになってからはアルホルチン旗のモンゴル族がオボーを祀る目的は大きく変わってきた。アルホルチン旗のモンゴル族はゲル型のオボーを祀っている。それは満洲族の家型のオボーへの対抗であった。アルホルチン旗のダルハという村は満洲族の村と接している。村の人口の三分の一は満洲族である。満洲族が自分のお姫様のお墓に家を作つて祀つたところ、ダルハ村のモンゴル族は自分のオボーをゲルの形に作つて祀るようになったというのである。その背景には土地をめぐる、満洲・モンゴルの争いがあった。ダルハ村のゲル型のオボーはそれ故ノトクのシンボルになった。モンゴル語のノトク(nutug)と

いう言葉は故郷を意味する。「ノトクのオボー」とは故郷のオボーである。モンゴル族にはノトクのオボーが少なかった。しかし、アルホルチン旗に満洲族が入ってきて、満洲・モンゴルの間に土地をめぐるトラブルが起ったことに起因してダルハ村の「ノトクのオボー」が建てられたのである。この問題を理解するためには満洲族の墓祀りを理解しなければならない。

満洲人には一族の女性の墓を祀る習慣がある。1669年、アルホルチン旗のバダマ・タイジと結婚したウェンチというゲゲ（「お姫様」という語）の墓がある。ゲゲは子供に恵まれなかつた。ゲゲの家来となるウィフィズという満洲官吏の子孫たちはこの墓を守って、祀ってきたのである。この墓はマンジン・マンハ即ち「満洲族の砂丘」とよばれる砂漠の中のタルチャクト山の南麓にある。滑石のこの山の頂上に大きな桑の木があり、四角のサチ（土で作った小屋）の中に埋葬されている。その上にゲゲの好きな家を作つた。そばに枝いっぽいの榆の木が三本ある。このあたりをオンゴンタラ（聖なる草原）という。

ゲゲの墓を祀ることによって満洲族の家畜が増えて、生活が非常に豊かになり、力士も強くなつたと言われている。その一例としてアルホルチン旗のナーダムにおいて満洲族の力士が何回もモンゴル相撲の横綱になったことなどが挙げられる。満洲族の人々はモンゴル語で話しながらも満洲人としての強いアイデンティティを持っている。ゲゲの墓を祀ることによって満洲族の人々は心と行動を一にしてきたのである。そして満洲人と姻戚になったモンゴル族もゲゲの墓を祀ろうとした。

そのため、モンゴル族はゲゲの墓から西南の方へ3000メートル離れたところに三つのオボーを建てた。それは真ん中にモンゴル族のタイジ（前出）アイマグのオボー、西側がモンゴル族のシャラトル部落（実は満洲族と姻戚関係がある）のオボー、東側が満洲族のオボーであった。

三つのオボーは大きさも形もまったく同じなので表面的には平等に共存しているように見える。しかしながら、モンゴル人の考え方によれば中央部が最上、西側が上、東側が下になる。モンゴル人は西側を「正しい側」、「上の座」と考え、東側を「間違った側」、「下の座」と考えている。タイジ部落はアルホルチン旗の貴族であるため彼らのオボーは中央部に建てられている。モンゴル族のシャラトル部落のオボーは西側にあって、満洲族のオボーは東側にある。

ところでオボーの本質である鎮め物はどのようなものであろうか。

「この三つのオボーを祀るとゲゲの靈魂はもつとも喜ぶ」とシャラトル部落の人々が言ったので満洲人はそれを信じて、モンゴル族に建ててもらつたオボーを喜んで祀つたという。しかし、オボーを祀るとき次のような儀礼が行われたのである。

「そのオボーをゲルの形で作つた。直径は3メートル。オボーの下にゲルの形に作ったサチを埋める。サチはノトクの一つの守護神である。モンゴル語のサチ（saca）というのはテントの形をした土製の像を指す。人間はこのサチを通じて天神と交流するという。モンゴル人は満洲人のオボーの下にサチの頭部を逆さまにして置いて、または呪いの言葉を書いた紙でたくさんの人形を作つて、頭を下にして埋めたが、満洲人は知らなかつた」（筆者の1999年フィールド・ノートより）

ゲゲのお墓の家はドアが一つ、窓が二つある。それに対抗するために三つのオボーを建てた。ゲゲは実家（皇帝の都、今の北京）のある西南の方向を向いているので墓の西南3000メートルのところにオボーを建てて、ゲゲの視線を遮つた。ゲゲの墓を覆つているサチは満洲族の貴族の住む家を真似て四角の形に作られている。それに対抗するためにモンゴル人はゲルのようなサチとオボーを作つた。満洲人の印璽を祀る習慣に対抗するた

めにモンゴル族はさらに呪いの言葉を書いた紙でたくさんの人形を作った。

「印璽とは清の康熙帝から授かったもので、幅0.5メートル、長さ5メートルの赤い緞子に黄色の満洲文字をいっぱい刺繡したものである。満洲族はこれを印璽と言う。印璽を保管している人の家を「大家」(Yeke ger)と呼ぶ。お正月の一日に皆が集まって一緒に印璽を祀る。異民族の人には見せない」。(筆者の1999年フィールド・ノートより)。

モンゴル族はその印璽を見ることができないので嫉妬して、大きな紙に呪語をいっぱい書いて人形を作ったという。そしてモンゴル族は自分のオボーの下にサチを正しく置いて埋めた。しかし、満洲族のオボーの下に埋められたサチの頭は下に向けて置かれているので置き方が完全に間違っている。その結果、満洲族のオボーの守護神はいつも怒っていると言われている。

その後、満洲族の故郷は砂漠化して、家畜がどんどん減っていったが、満洲族の賢者がある日「三つのオボーがゲゲの視線を遮っているため満洲族の生活は悪くなっている」と指摘した。そこで満洲族はモンゴル族と一緒にオボーを祀るのをやめたという。

つまり、アルホルチン旗のオボーの鎮め物、すなわち幸福と災害をもたらすサチは、その位置を逆さまに埋めることによって、満洲族に対する強い対抗意識を表している。言い換えれば、表面的には満洲族の形式を模倣し、友好的に見せかけながらも、それとは相いれない対抗心が隠されている。このように、共存と対抗という両義的な心性を持っていることはアルホルチン旗におけるオボー祀りの特徴であると言えよう。

## 5 山を祀る習慣

アルホルチン旗には山が多い。山にまつわる

伝説も多い。山が多いことはアルホルチン旗の地理的特徴でもあり、ほとんどの村はいくつかの山を所有している。人々は自分の所有している山を一番きれいだと自負する。そのため他人の山を占領しようすることはほとんど起こらない。祀っている山に勝手に登ってはならない。木や植物を切ったり、刈ったりしてはならない。山の守護神の供え物を盗むと雷が落ちると言われている。

山を祀るとき、山のオボーを建てる。「最初、アルホルチン旗の貴族たちはグリゲルハンという山を祀っていた。しかしこの山の西側から流れている川が隣のバーリン旗に向いて流れ、アルホルチン旗の福をバーリン旗へ流していたので、この山を黒呪術で懲らしめ、祀るのをやめて、ゴゴスタイルという山を祀るようになった。ゴゴスタイル山のオボーを建てるとき、大きな穴を掘った。アルホルチン旗のオンドラフというメイリン(清朝の光緒帝によって与えられたモンゴル貴族の軍職)はその穴に入って一時座ってから出てきた。メイリンは満洲皇帝の官吏だから埋めてはならない。そのため象徴的な儀礼を行ったのである」(Buyanulji-1985: 176-177)。モンゴルでは人供犠の風習が次第に捨てられたが、アルホルチン旗では満洲族の登場がきっかけになっている。

チャガンウンドルという山はアルホルチン旗の王が祀っていた山であった。1906年の夏、この山を祀るとき王の馬が暴れて、王は馬から落ちて手に怪我をした。王は怒ってこの山の祭礼を中止させた。しかし、西ウジムチン旗の王はこの山を祀った。それから西ウジムチン旗の力士が強くなってきたので、アルホルチン旗の王はこの山の祀りを復活させた。そのためこの山にはオボーが二つある。山を祀るとき、二つの旗の間でトラブルがときどき起きてきた。牧民たちはこの祀りへの参加を誇りにしてきたので、この習慣はよく保存してきたと言われている。

モンゴル農民にも山を祀る習慣がある。哲里木

盟のモンゴル農民は五穀で山を祀るのが一般的である。オボーの下に米を埋めて祀る。「哲里木盟のボーロという山の西側でひとりのおじいさんが畑を作ってくれていた。茄子畑の一つの茄子が杖のように生えた。夜になるとピカピカと光る。おじいさんは、それがボーロ山の鍵であることを知って、その茄子で山のドアを開けてたくさんの金銀を拾ってきた。ところが、茄子を山の中に忘れたのでそれから誰もこの山を開けられなかった」という」(Nasun 1993: 88-89)。このことは、茄子がこの山のオボーに埋められたということになる。茄子はこの山の守護神になったのである。

アルホルチン旗のモンゴル農民もオボーを建てて山を祀る。

「モンゴル農民が定住しているウンドルファという村がある。彼らは石で庭をつくるために周囲のほとんどの山を掘っていた。しかし、この村で祀っていたウンドルファという山だけが掘られていない。昔はこの山を家畜で祀っていたという。今は家畜がいなくなったので、彼らは豚肉と小麦粉で作った羊などで山を祀っている。牧畜村の親戚が彼らに羊を貸してあげようと言ったが、彼らは自分たちの山は自分たちで祀るのだと言って断った」という」(筆者の1999年フィールド・ノートより)。

このように牧畜生活を完全に失った彼らの生活にも昔の自然崇拜の習慣が多少残っている。小麦粉で羊を作るのは昔の習慣の残存であろう。その信仰によりこの山が掘られていないと思われる。

山祀りにはその山を所有している集落(村)の人々だけの参加が原則であった。牧村のモンゴル族は農村の山祀りへの参加を恥ずかしく思うと言う人が多い。しかし、最近、牧村と農村との物的交流が頻繁になっているので、他の村の山祀りへの参加が一般的になっている。また、有名な山祀りならどこの村の人でも参加が可能である。

「アルホルチン旗のアルスラン(「獅子」の意味)

という山を祀れば、相撲にもっとも強くなる。そのためこの山はブヒン・オボー(「力士のオボー」という意味)とも呼ばれている。この山を祀ったお陰でアルホルチン旗のナムスライという力士が西ウジムチン旗のナーダムで優勝したという。満洲族の男たちもこの山を祀った。そして満洲族のボムボライという力士はアルホルチン旗のナーダムでモンゴル相撲で優勝した。アルスラン山を祀る力士は獅子の力をもらうので、満洲族の人がアルスラン山を祀るのを止めさせた」(Buyanulji—1987: 8)。アルホルチン旗の横綱テケシという人がこの山を祀って獅子の力をもらったという。

アルホルチン旗におけるアルスラン山を祀る儀礼は排他的性質を持っていると思われる。

というのは、満洲族はモンゴル族と一緒にノトクのオボーを祀って失敗したため、モンゴル族から遠く離れて自分のオボーを祀るようになった。そしてアルスラン山を祀る儀礼からも排除されたため馬のオボーを祀ることにした。オナガン・オボー(子馬のオボー)という小山の祀りがそれである。

「昔、千頭の馬を持つジナという満洲族の人があった。ある日、一頭の金の子馬が彼の馬群に走って入ってきた。ジナはその子馬を捕まえようとしたが、彼の馬飼いは金の子馬に絶対触れないで下さいと忠告したので捕まえるのをやめた。その年からジナの馬群は増え続けて、数え切れないほどになった。そのときからアルホルチン旗最上の良馬はこの群から生まれるようになったので、モンゴル族から隣の旗の人々までマンジン・アドー(満洲族の馬)を求めるようになった。金の子馬はときどきある小山に走って登るので満洲族の人々はこの小山にオボーを建てて、サチを埋めて祀った。それからマンジン・アドーは満洲族の誇りになった。モンゴル族もオナガン・オボーを祀ろうとしたができなかった。なぜなら「この小山は満洲族の砂漠の中にあり、異民族は入ってはいけない」

からである(筆者の1999年フィールド・ノートより)。

満洲族の山祀りの儀礼は排他的である。相撲と競馬はモンゴル族と満洲族の間でずっと行われてきた。アルホルチン旗のナーダムでは、モンゴル相撲に優勝した満洲人が少なかったが、競馬では満洲族の馬の優勝は多かった。今でも、アルホルチン旗では優れた馬をマンジン・アドー(満洲族の馬)と言う人が少なくない。このようにみると、満洲族の山祀りはモンゴル族との競争を表す行為の一つになっていることが明らかである。

現在、満洲族の村は三つあるが、彼らは村から20キロメートル離れているマンジン・マンハという砂漠にある川や山の名で自分たちの村を名付けている。その砂漠をウリジバヤルという満洲族の若い人が守っている。満洲族はこの三つの村の真ん中にあるバヤンチャガン山を祀っている。この山は満洲族の神聖な山なので、山を祀る日は満洲族の人々の精神統合を行う機会でもある。山祀りの儀礼が終わると、「バヤンチャガン山のナーダム」が行われる。マンジン・ナーダムとも言われる。モンゴル族も参加することができる。このナーダムは満洲族の村の真中で行われるので人々と交流するチャンスにもなっている。満洲族はモンゴル族の伝統的祭りであるナーダムに自分たちの名をつけていている。そして満洲族のナーダムが一番成功したという話が一年中話題になる。

アルホルチン旗の山祀りは一般的であり、全モンゴルの山を祀る儀礼とほぼ同じであると思われる。ただし、モンゴル族の力士のオボーを祀る儀礼と満洲族の馬のオボーを祀る儀礼は排他的であり、競争や対抗という意味合いを持っている。

## 6 樹木を祀る習慣

モンゴル人の樹木を祀る習慣について内モンゴル師範大学教授 Buyanbatu 氏の『モンゴル族の

樹の崇拜』(1990)という論文集で論じられている。氏は「樹を祀る習慣はモンゴル人の自然崇拜における伝統的信仰の一つである」と指摘している。(Buyanbatu—1990: 2)。「モンゴル人は単独に生えている大樹に恐怖の念を抱く。そのため一本の大樹を祀るようになった」。(Buyanbatu—1990: 4)「モンゴル人は榆、柳、樺、松、白檀等の樹を祀る習慣がある」(Buyanbatu—1990: 30-47)と実例を挙げて論じている。「モンゴル人の祀っている樹は母樹、父樹、女性シャーマン樹、天の樹、シャーマンの樹、祖先の樹、オボーの樹、大樹と分類される」(Buyanbatu—1990: 60-87)。モンゴル人の大樹崇拜の特徴は葉の密生した独立樹を祀ることであるというのは氏の主要な論点である。さらに「文献によれば、モンゴル人は森を祀る習慣がある」(Buyanbatu—1990: 29)と述べられているものの、実例が挙げられてない。

アルホルチン旗のモンゴル族の場合も大樹を祀る習慣が認められるが、実は森を祀る習慣が主な特徴になる。

「アルホルチン・モンゴル族はオンゴン・モド(神聖な森)、シャンシン・モド(大樹)を祀る。そういう樹に登ってはならない、切ってはならない。切ったら血が出る。切った人の子孫は体から血が出て死ぬ。そういう樹が二本並んでいる場合、その間を通ってはならない。それは父母樹である」などという(Buyanulji—1986: 8)。アルホルチンのシャーマンの歌に「大地のお臍から生まれたシャンシン樹だぞ、すべての枝に守り神がいるよ」という詩がある。シャンシン・モドという樹を祀るのは雨乞いのための儀礼であるが、主に農民化したモンゴル族が祀る習慣である。この点では哲里木盟の農耕生活をしているモンゴル族と似ている。つまり Buyanbatu 氏の論じている一本の樹を祀る習慣と共通点を持っている。ただし、今までの調査によればオンゴン・モドという森を祀る習慣はアルホルチン旗のモンゴル族の樹木を祀る

習慣における独特のものである。

アルホルチン旗王が「オンゴン・モド」と名づけた森は三つある。それらは、オンゴン・モド、フイスイン・モド(臍の森)、エブゲディン・モド(祖先の森)である。

この三つの森を祀ることはアルホルチン・モンゴル族の樹木崇拜における大きな儀礼である。その中の一つはオウムレンという川の上流にあるバヤンボルラジ(地名)のオンゴン・モドという森である。

「以前、アルホルチン旗王が全部大樹からなったこの森を祀っていた。オンゴンにはお墓という意味もある。確かにこの森にアルホルチン王の祖先の墓が建てられている」(HuturangG-a1996:8)。ここで祖先のお墓の祭祀とオンゴン森の祭祀儀礼は一致している。「その森は厳重に守られていた。森の中に人は入ってはならない。森の広さは3平方キロメートルであった。1951年、この森が全部伐採されてしまった。そのため周りの人々は北へ10キロメートルのところに移住した。それでも彼らは自分の村をオンゴン・モドと名づけた」(HuturangG-a-1996:107-108)。崇拜の対象物は破壊されたが、その森を祀っていた人々の信仰は変わらなかったようである。

もう一つはオルト・フブ(長い山谷)村のフイスイン・モドという森である。この森は大興安嶺の森林と繋がっているので虎や豹などの猛獸がいた。後に、王の命令を受けたアルホルチン旗のウゼドル・アイマグという狩猟民がこの森の虎と豹を狩猟して森を守ってきた。この森にオボーが二つある。一つは王の祀るオボーであり、一つはこのあたりの牧民と狩猟民の祀るオボーである。地理的にこの森はアルホルチン旗の真ん中あたりにあると言われ、フイスイン・モド(臍の森)と名づけられているのである。人間は臍から生まれるとモンゴル人が言う。「アルホルチン王はこのフイスイン・モドを祖先が誕生した聖地として毎年6

月8日に祀っていた。それはとても莊厳でにぎやかな祀りだったという」(HuturangG-a-1997:130-131)。アルホルチン部族の祖先が誕生した聖地の象徴になったこのフイスイン・モドは今も密林のまま残っている。

アバガハラ山の南麓にエブゲディン・モド(祖先の森)という森がある。この森にアルホルチン旗王と貴族たちの祖先のお墓がたくさんある。つまり森を祀ることは祖先のお墓を祀ることになるのである。

「人間は樹から生まれた」という言い伝えがある。そして人間が亡くなると靈魂は樹に戻ってオンゴン・モドの中に存続するという。アルホルチン旗のモンゴル族は祖先のお墓を祀るためにオンゴン・モドという森を祀っている。

要するに、アルホルチン旗のモンゴル族は主に一本の独立した樹ではなく、複数の木々からなる森を祀る。その森を祀ることは祖先の墓を祀ることである。つまり「樹木信仰」は「祖先崇拜」を意味するものである。「祖先崇拜」を通じて、もともとの「自然環境」を保全しているとも考えられる。ここで出自の社会的、自然環境的要素が一体化されて、表象化されていると考えられる。

## 7 むすびに

以上、アルホルチン旗におけるモンゴル族と満洲族のオボー崇拜に関する若干の考察をしてみた。アルホルチン旗のモンゴル族のオボー祀りはモンゴル全体のオボー祀りと共に通点はあるものの、自分たちの勢力範囲を示そうとしたアルホルチン独自の特徴を持っている。その特徴は周辺に住む異民族との共存と対抗という両義的な行為で表されている。つまりアルホルチン旗のオボー崇拜にはアイデンティティの表象という要素が色濃く見られる。オボーの下にサチを埋める儀礼、森を祀る儀礼、即ち墓を祀るという祖先崇拜を通じ

て、「集団のアイデンティティの確認」が行われている。満洲族は表面的には協調する姿勢を見せて いるが、事実上自分たちのゲゲのお墓を祀る儀礼、子馬のオボーを祀る儀礼を通じて集団のアイデンティティを強調している。つまりモンゴル族、満洲族のオボー祀りにおける儀礼の本質は、互いに競争し、対抗しているということではないだろうか。

### 引用文献

- 阿拉坦(ほか)(1997)、(中国文:『阿魯科爾沁旗誌』)、内蒙古人民出版社  
 石川 栄吉(ほか)(1998)、『文化人類学事典』、弘文堂  
 江上 波夫(1961)、『騎馬民族国家』、中公新書。  
 Sampilnorbu(1990), Mongol-un jang Agali-yin Toimu(モンゴル文:『モンゴル風俗概要』)、遼寧民族出版社  
 Sainchogt(1998) Ami-yin Situlge(モンゴル文:

- 『生命崇拜』)、内蒙古人民出版社  
 Sonum, Aliy-a (1994) Ordus-un Gajar-un Nere-yin Domug(モンゴル文:『オルドスの地名の伝説』)、内蒙古文化出版社  
 SulfungG-a (1987) Bagarin-u Jang Uile-yin Durasumji(モンゴル文:『巴林風俗民情録』)、内蒙古人民出版社  
 CaGan (1992)、Sunid-un Jang Agali(モンゴル文:『蘇尼特風俗民情録』)、内蒙古人民出版社、  
 Nasun (1993)、Jirim-un Gajar-un Nere-yin Domug、(モンゴル文:『哲里木の地名の伝説』)、内蒙古文化出版社  
 HulturangG-a (1997)、Aru Horqin-u Agula Usu  
 (モンゴル文:『アルホルチンの山水』)、内蒙古青少年出版社  
 Buyanulji (1986)、Aru horqin-u Arad-un Aman Johiyal(モンゴル文:『阿魯科爾沁旗口承文学集』)、阿魯科爾沁旗文化局  
 Mansang (1990)、Mongol Boge murgul(モンゴル文:『蒙古薩滿教』)、内蒙古人民出版社

(さいんちょくと)